

あとがき

乱世に生きる文人に興味があった。怒涛の時代を生きるゆえ、現代の我々と異なる価値観を有していたのではという思いがあった。阮籍「詠懐詩」を読んだとき全く読めなかった。他の作品と異なった「暗さ」だけが印象として強く残った。

修士論文では、阮籍「詠懐詩」の作品世界に展開された空間の特質について考察した。博士に入ってから、その周辺の作品も読むように心がけた。そうした中「詠懐詩」に見える一つの時間表現が気になった。それを手がかりに阮籍詩に見られる時間把握の特質を分析した。この時読んだ中国文学とは全く関係のない時間概念や相対性理論に関する本がとて面白かったのが印象に残っている。

学会での発表を言い渡されたことがあった。発表に間に合わせるため、「詠懐詩」に言及した資料を集め、何か論じられないかと考えた。そこで発表したことについて興味を持ってくださった先生が何人かいた。後世における阮籍「詠懐詩」の受容に目を向けるきっかけとなった。博論では六朝期のみを考察の対象とした。

博士五年目のとき、香港に行くことになった。退学することを考えた。軽い気持ちで指導教官である和田先生に相談をしたら、思いがけず博士論文の話が出てきた。遠い先にぼんやりと考えていたことが、急に現実的なものとなった。約二年間日本と香港を歩き来して、それまでまとめきれいかなかったものを論文として整理した。

今思えばそこまで明確な目標をもっていなかったのにも関わらず、こうして博論を完成させることができたのは、いろんな幸運な巡りあわせがあったからだと思う。

最後に、修士から約十年間にわたり、数えきれないくらいたくさんアドバイスをくださった和田英信先生、論文指導のため休みの日わざわざ大学まで足を運んでくださった牧角悦子先生、外部生であるのにも関わらず快く受け入れてくださった大上正美先生、渡邊義浩先生をはじめ研究で関わった多くの方に心より感謝を申し上げたい。また、長い間広い心で見守ってくれた家族にも感謝したい。